

# 登山界“おちこち”の人

インタビュー連載 第21回

山の世界の彼方此方で活躍している人々をたずね、「そうだったのか。」を聞き出します。

**登山系イラストレーターとして、実用コミックエッセイを多数出版。デビュー作、「悩んだときは山に行け!」は、山ガールブーム先駆けの書として大ヒット。近年アルパインツアー企画の山旅同行でも人気が高まっている、鈴木みきさんに山との出会いと山登りへの思いを聞きました。**

— カナダで過ごした1年間、それが山との出会いでした。そこで登山を始め、山にのめりこみ、いまの活躍の場も山です。およそ20年前のカナダでの生活が発端となり、山との関わりはますます深まるばかりです。カナダでのことを少し聞かせてください。

私の最初の本、「悩んだときは山に行け!」はカナダの旅から始まります。21年前、漠然と海外を旅したいと思っていた私の前にカナダ人のバーバラが登場して、「うち(カナダ)にすればいいよ。」と言うのです。バーバラは当時、日本で英会話スクールの先生をしていて、私は友人のガールフレンドとして紹介されました。そして1年半後にバーバラの帰国に合わせてカナダに渡り、グレイハウンドバスでトロントから1ヶ月半の旅が始まります。そしてカナディアンロッキーの玄関口、バンフの町で私は山に出会ってしまうのです。しかしまだ旅の途中のこのときは、まさかこんな山人生になるとは思ってもみませんでした。

その迫力の絶景をバンフからジャスパーまで楽しもうと思ったのですが、公共交通機関がないのを現地知って、「あら、どうしよう?」という感じでした。ユースホステルの掲示板でバンフからジャスパー間を2日で1往復するバス(途中下車可能)を見つけて渡りに船という感じ。でも2日で1往復なので到着したその先に進むには2日後しかありません。次のユースホステルまで歩いて行ったり、知り合った人の車に乗せてもらったり、ヒッチハイクもしましたよ。ロッキーに限らず、海でも街でも私たちの旅

はいつもこんな感じでしたね(笑)

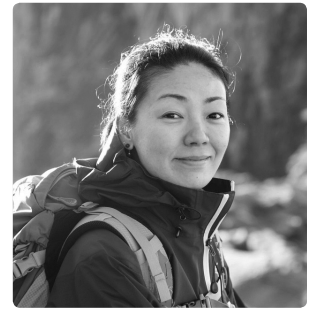
旅に行っている以外はバーバラの友人の家にホームステイしていました。場所はハミルトンというトロントから車で1時間くらいの郊外の街です。観光ビザで入国していたので、ホストファミリーと普通の生活をしていました。

— 登山雑誌、「ヤマケイJOY」の読者モデルに応募して業界デビューしました。

帰国後にカナダで見た山々が忘れられず、無性に行きたくなくて本屋さんで山の雑誌を見つけました。私、日本のどこに山があるかも知らなかったんです。それでどうやって行ったらいいのかな〜とページをめくっていたら取材同行モデルを募集していたので「これだ!これなら連れて行ってもらえる!」と…ヨコシマな理由で応募しました。フリーターで時間の融通がきいたので、年に一、二度は声をかけてもらいました。でも「業界デビュー」なんて感覚はまるでなかったです。取材のときはここぞとばかりにカメラや編集の人たちからたくさん登山のことを教えてもらいました。

— 何シーズンか、白馬村八方の山小屋でアルバイトをしています。それから本格的に町にもどって、登山系イラストレーターへの道を歩むことになりました。

カナダから帰ってから、アパレルブランドでアルバイトしていましたが、冬の閑散期は休職してスキー場のアルバイトに行っていました。そうしているうちにもっと「山のなかに身を置きたい」という願望が膨れ上がってしまい、アパレルのアルバイトを辞めて夏の白馬村のア



イラストレーター  
鈴木みきさん

ルバイト募集に応募しました。村営関係の事業が多くあるので、八方池山荘に配属になったのはたまたまです。本当はグリーンパトロールがよかったのですが、登山経験があまりないので山小屋になったという感じでしょうね。

山荘の1年目に不帰ノ嶮を越える縦走をしました。無知でしたから初縦走が単独での白馬岳から唐松岳でした。いま考えると「よく行ったなあ〜」と驚きます。でもその山小屋の女主人が元々硬派な山やで、心配だったとは思いますが勇気づけて見送ってくれたのが印象に残っています。

— 独特なイラストとコミカルなストーリーが読者の心をくすぐります。フリーター女子が山を舞台に心機一転活躍してわけですが、そのきっかけとなった人たちも、いまは、みきファンです。



▲毎年同行ツアーを企画しているキナバル山にて

落書きをするのは小さいころから好きでしたが、絵を習ったということはありません。グラフィックデザイン科の専門学校には通いましたが、生活費を稼ぐためのアルバイトが忙しくて、熱心な生徒ではありませんでした。この分野で基礎がないというのは仕事を始める上でコンプレックスだったのですが、心優しい読者に支えられていまは個性ということで開き直っています。

コミックのストーリーはすべて自分で筋書きからつくります。はじめに編集者とテーマを決めて、あとは白紙の紙を通常146ページ埋めていきます。けっこう大変な頭脳労働と手作業なのです。

いまの私になるすべてのきっかけを作ってくれたのはヤマケイの編集者さんたちだと思っています。いち読者同行モデルからルポを書かせてくれるようになって、そのうちにイラストも使ってくれるようになって…、ヤマケイなしには「書く・描く」のを仕事にしようとは思わなかったと思います。でもイラストレーターになっていなくても山に仕えることは選んだでしょうね。例えばアルパインツアーとか！(笑)。

—— 山岳会に所属しない、いわゆる未組織登山者が大勢を占める、いまの日本の登山社会ではビギナーが手にとっても

わかりやすく、役に立つ参考書が必要で  
す。近著、『山、楽しんでますか？安心安全のための「次のステップ」』（講談社）で読者に伝えたいことは何でしょう。

私とそのコミックでお伝えしたかったのは第一に「初心忘れるべからず」ということです。しかしいつまでも初心者に甘んじず、もっと自発的に自由に登山してもらいたいということでもあります。意外と思われるかもしれませんが、ここ数年の登山初心者、とくに女性はとて真面目に登山をしています。真面目なのは悪いことではありませんが、情報が多過ぎるために教則本通りのルールに縛られ、山にまで人間関係を持ち込んで、まるで気忙しいのです。もしかしたら彼女たちにいま必要なのは、それを笑い飛ばして、たしなめてくれる先輩なのかもしれません。

山は多少失敗しないと本当に登山に役に立つ力が自分のものにならないと思うんです。頭でっかちにならず、もっと自分の感性や経験を生かして、自分にちょうどいい、自分らしくて、心地よい登山を見つけてほしいと願っています。

(インタビューおわり)

鈴木みきさんは、狭い世界の登山界ではいままで出会ったことのないタイプの人。失礼ながら我が社の企画ミーティ


ングでも、「その人だれ？あ、そうなの平凡社から出版したの。」、というところから、デビュー作を一気読みさせてもらいました。イラストの上手下手は絵心皆無だからまるでわかりませんが、コミックを読む気軽さの中に登山の基本的留意点などをさりげなく書き込んであるので、登山の原理原則には口うるさいベテランもきつと「うーん、なかなかうまいこと言うなあ」と安心して読了できます。

ご本人は潜在能力の高そうな女子登山人的雰囲気漂わせていながら、著書の中ではひげらかしもなく、それでいて初心者にとっては脱ビギナーへの良き参考書としてシンプルな筆致のイラストで山の魅力を描いています。てらいのないそんなところに、みきファンは惹き付けられるのではないのでしょうか。

(平成28年11月21日 聞き手：黒川 恵)

**新刊紹介**

**「あれを食べに、この山に行ってきました」**



鈴木みき  
食と酒の山紀行  
行ってききました  
あれを食べに、この山に行ってきました  
食と酒の山紀行

**食と酒の山紀行**  
(コミックエッセイ・山)  
鈴木 みき 著

食べて、飲んで、一期一会の語らいにほろり。山の楽しみは頂上だけじゃない!

A5版並製 160ページ  
定価1200円(税別)  
平凡社刊